

テニュアトラック制を先行導入している機関ではどのように取り組んだのでしょうか？

～旧科学技術振興調整費「若手研究者の自立的な研究環境整備促進」採択機関に聞いてみました！～

- Q1 テニュアトラック制の実施状況を教えてください。
- Q2 テニュアトラック制を導入して良かったことはありますか。
- Q3 テニュアトラック制を今後どのように活用していきますか。

東京農工大学（平成18年度採択）



中川 正樹
大学院工学研究院 教授

- A1 テニュアトラック教員が各専攻に研究室を構えながらも、全学的な視点での育成方針と計画に基づき、研究に集中できるように若手人材育成拠点を設置しました。補助事業初年度に全教員数の5%、准教授の13%に相当する22名のテニュアトラック教員を採用し、同数のテニュアポストを用意しました。そのうち優秀なテニュアトラック教員については、任期途中の3年目の中間評価の際に、4名をテニュア教員として採用し、5年の任期終了時のテニュア審査においては、15名を採用しました。
テニュアトラック制を定着させるため、平成20年度から大学運営費交付金による自主経費により、実施期間中に5名を採用しております（工学研究院では若手の准教授採用は基本的にテニュアトラック教員として採用、農学研究院では助教採用はすべてテニュアトラック教員として採用）。スタートアップ研究費は本部、部局、専攻のマッチング形式で準備しています。
- A2 テニュアトラック制により優秀な人材を採用でき、そして研究能力を一層伸ばすことができました。補助事業実施期間中には、テニュアトラック教員は平均0.9件の表彰及び学会賞等を受けており（学内准教授平均0.6件）、科学研究費補助金の新規採択率はテニュアトラック教員平均51.5%（学内平均25.3%、全国平均24.1%）と、いずれも高い優位性を示しています。また、補助事業実施期間中における外部資金全体では、テニュアトラック教員1人当たり7.1件、4,100万円を獲得しています。
- A3 補助事業終了後は、全学組織であるテニュアトラック推進機構により、部局主体のテニュアトラック制の普及・定着を予定しています。

大阪大学大学院工学研究科（平成18年度採択）



馬場 章夫
理事・副学長

- A1 工学研究科では、テニュアトラック制の定着化を念頭に、講師・助教の年間新規採用数の約2～3割に当たる5名程度をテニュアトラック教員として、毎年継続的に採用してきました。平成20年度以降は自主経費での採用を行い、5年間で23名を採用しました。
平成22年度には、テニュアトラックの任期が終了する8名にテニュア審査を実施し、6名をテニュア教員として採用しています。
- A2 国際公募と外部審査委員も参加した透明性の高い選考システムを構築し、採用者数と同数のテニュアポストを用意することで、優れた人材を集めることに成功したことです。テニュアトラック教員の研究成果は、Science誌等の主要な学術誌に多数の論文が掲載されています。また、文部科学大臣表彰4名、Feynman賞のアジア人初受賞など多数の外部表彰を受賞しました。科学研究費補助金等の外部資金の獲得も順調であり、最先端・次世代研究開発支援プログラムにも採用されています。
- A3 工学研究科では、補助事業終了後もテニュアトラック教員として毎年度5名を採用することを継続する予定です。さらに今後は、全学的な取組として設置した「若手研究者育成ステーション」に、他部局も加わりテニュアトラック制を全学的に推進していく予定です。

九州大学（平成18年度採択）



藤木 幸夫
理事・副学長（研究担当）

- A1 テニュアトラック制の導入を図るためには部局単位の組織改革を含むシステム改革が必要との観点から、学内部局に5年後のテニュアポストを準備することを条件として、①若手研究者育成、②新領域開拓、③研究組織改革を盛り込んだ研究プロジェクトを募集しました。全学の研究戦略委員会で審査を行い、実現性の高い提案をした部局を選定しました。その後、各部局単位で国際公募を行い、テニュアトラック教員を平成18年度は16名（補助金による経費）、平成19年度は8名（総長裁量経費）採用し、学内で制度を発足させました。
5年のテニュアトラックの任期終了者に対して、テニュア審査を実施し、平成23年4月には、13名（平成19年度採用者の前倒し審査2名を含む）がテニュア准教授として本学に着任しています。

- A2 参加部局では本制度により小講座制廃止、研究部門改組、新研究分野創出などの改革が進展しました。テニュアトラック教員は高等研究院に所属し、且つ全学とプロジェクト参加部局の支援により自立した研究環境のもと業績を重ねました。文部科学大臣表彰若手科学者賞の7人の受賞やNature Cell Biology誌への論文掲載などその卓越した研究業績や競争的外部資金の獲得状況（24名の5年間の総額は5億円以上）は、学内の周辺の研究者にも大きな刺激を与えています。
- A3 補助事業終了後は、平成23年度から、テニュアトラック制を普及・定着する部局の対象を全分野に広げて参加希望部局の提案内容を審査の上、参加部局を決定します。テニュアトラック教員は全学的な組織として立ち上げた高等研究院の所属となり、大学本部とテニュア採用予定部局が人件費及び研究費を分担し、制度を普及・定着させていきたいと考えています。

北海道大学（平成19年度採択）



川端 和重
先端生命科学研究院
研究院長

- A1 テニュアポストを用意する参画部局（ホスト部局）を学内公募で決定し、部局と全学の委員会の二段階選抜によって各分野のリーダーになり得るテニュアトラック教員を年次計画の下に採用しています。テニュアトラック期間中は、部局横断組織である創成研究機構に特任助教として採用し、ホスト部局のアドバイザーによるサポートを受けつつ研究に従事させています。
- A2 平成22年度テニュアトラック教員13名の競争的外部資金獲得額は、JST戦略的創造研究推進事業「さきがけ」の他、科学研究費補助金など87,087千円を取得し、各種奨励賞受賞者は、毒素シンポジウム奨励賞をはじめ5名であり、挑戦的・独創的研究活動の推進が可能となったことです。
- A3 今後は、年間研究費については、外部資金獲得能力を醸成するため、年々徐々に減額していき、補助事業終了後も人材育成本部等を通じた学内コンセンサスを得つつ、毎年3名程度のテニュアトラック教員を継続的に採用する予定です。

岡山大学（平成20年度採択）



穴戸 昌彦
異分野融合先端研究コア長

- A1 テニュアトラック教員の公募における審査ならびに中間評価の段階で、海外有識者を含め半数を外部委員で構成する透明性の高い審査体制を構築し、11名のテニュアトラック教員の採用と中間評価をしました。研究資金、研究スペース、博士研究員、分野の異なる複数のメンター等を措置し、学内の若手研究者との共同研究等を奨励し異分野融合研究を推進しています。また、5年のテニュアトラック期間の任期終了を待たずに、優秀なテニュアトラック教員については、中間評価の結果に基づき、3名を准教授（特任）に昇任させ、テニュア資格を付与しました。
- A2 テニュアトラック制の導入は自立した若手教員の育成を強力に牽引しています。すなわち、テニュアトラック教員は研究の立案・実施・将来の展開及び研究室の管理・運営など全ての責任を持たされていることから自立性が育っており、特に外部資金の獲得等では部局所属教員と比べ群を抜いています（一人当たりの額が本学自然科学研究科助教と比べて約5倍；平成21年度のデータ）。
- A3 補助事業終了後は、現行のテニュアトラック制を拠点型と位置付け、自然系新規採用教員の20%をテニュアトラックとして採用する予定です。

大阪府立大学（平成20年度採択）



石田 武和
大学院工学研究科 教授

- A1 “「地域の信頼」と「世界へ飛躍」の調和を人材育成に”を旗印に、公立大学や地域の大学に役立つテニュアトラック制の先導モデルとなれるようにとスタートしました。自立的研究環境を整備するため、十分な研究資金と研究スペースを用意し、8名の支援スタッフの雇用、自主経費も投入し共通研究インフラストラクチャの充実など、拠点の魅力もアップしています。教員の国際公募にあたっては、英文公募要領が法律面で問題がないか、専門機関にチェックを依頼し慎重を期しました。出産・育児等のライフイベントによるトラック期間延長、支援員の雇用など大学のサポートを拠点HPにアップしていますので、トラック期間中のさまざまな不安も解消されています。
- A2 テニュアトラック教員の科学研究費補助金採択率は一般教員の実績を大きく上回る50%に達し、民間の財団等からの外部資金も多く、加えて、科研費若手研究（A）、JSTさきがけ・CREST、総務省SCOPEなど大型競争的資金の獲得でも大健闘しています。Optical Express誌のSpotlight認定、Nature誌、Nature Materials誌などのインパクトのある論文の出版、文部科学大臣表彰若手科学者賞などの受賞に見られる若手の目覚ましい活躍から、法人の持続可能な発展を支えられるスーパースターの育成が期待できるようになったことです。
- A3 補助事業終了後もテニュアトラック教員の在籍者10名の規模で「高インセンティブ型テニュアトラック制」による若手教員育成を継続します。切磋琢磨する大人像をあこがれの職業として見る学生を鼓舞できるキャリアパスを設計できれば、学内教職員の共感を得ながら進めてきたシステム改革も仕上げの時を迎えることでしょう。